

# 『指導者親子』

気づけば二人旅



半田卓也  
中京大学硬式野球部監督

半田安利  
愛知西リトルシニア監督

「いろいろと好きにさせてもらいました」

「悩みながら自分の道を進んでほしい」

## 甲子園の夢を叶えた 息子の決断

息子は常に自分の道は自分で決めてきた。父は息子の選択を見守り続けてきた。そして息子と父は同じ野球指導者の道を歩んでいる。

愛知西リトルシニア監督半田安利と、その息子で中京大学硬式野球部監督半田卓也。ふたりの監督の道は、離れているようで、ふと気づくと交差していた。

息子卓也が野球を始めたのは小学生の頃。父安利が指導する愛知西リトルシニアの練習場で、卓也は野球を覚えた。中学時代は、父が指揮する愛知西リトルシニアへ入団。チーム内では、監督と選手として一定の距離感をとっていたという。

中学卒業後、卓也は甲子園出場を目指し、中京大中京に進学。高校3年の夏、レギュラーで甲子園出場を果たした。息子の夢の裏側で、父の思惑は少し違っていたという。

「高校に入る時、甲子園を目指すなら東邦の方が確率は高いと思っていました。そんな予測を卓也は良い方向に裏切ってくれましたよ。甲子園の開会式で、愛知の代表として堂々と行進する姿を見たときは胸が熱くなりましたね。」

卓也は自らの決断で夢をひとつ叶えた。卓也は、高校卒業後、中京大学を経て一般企業に就職した。就職1年目の冬、転機は突然に訪れた。中京大学硬式野球部のコーチを依頼されたのだ。卓也はこう振り返る。

「大学時代の恩師からのお話でした。中京大学は伝統校です。コーチになりたいと思って飛び込みました。」

誤を繰り返しながら、指導スタイルを確立していった。

「大学生は事細かに指導しすぎではやる気を削いでしまう。とはいえ、自主性を尊重して声をかけずには指導者失格です。一人ひとりという関わるかのバランスを常に考えています。」

コーチ就任から5年半、卓也は27歳の若さで監督に就任した。指揮官として手腕を振るう息子。安利もまた先輩指導者として助言や教示を送ることはなかった。

「私は中学生、卓也は大学生。どちらが楽に教えられるなんてことはない。そして教え方には、年代によってまったく違う難しさがあります。」

目の前の選手にどう教えるか。それは、結局のところ指導者が自分で見つけなくてはならない。そんな経験則が、父に息子を見守るスタンスを取らせ続けたのだろうか。

## 親子の間の 無言の信頼関係

同じ監督という立場にあっても、安利と卓也は目指すものが違う。父は監督業と息子への想いをこう語る。

「私は仕事も別にしないで、指導者筋でやってきた訳ではありません。けれど、指導者として過ごした32年は、いつも新しい発見に満ちていた。選手と向き合う時間を大切にしながら、まだまだ指導者として成長していきたいです。」

卓也は勝つことを求められるチームにいます。その上、教えるのはこれから社会に出る大学生。責任もプレッシャーも大きいでしょう。それでも卓也は、やるべきことをきっちりやってきてくれました。だからこれからは信



大学生の指導に頭を抱えながらも、卓也が父に助言を求めることはなかった。試行錯誤

## 悩む息子と見守る父

指導者を職業とする息子を、父は何も言わずに認めたという。  
「反対する理由はなかったです。高校を選んだ時と同じ。本人が納得できるならどんな進路でもいと考えていました。」  
こうしてコーチとなった卓也だが、最初は指導者として悩める日々が続いた。  
「教えるということは本当に難しかった。同じように指導しても、選手によって受け止め方はまったく違う。僕は今まで、自分のことしか考えて野球をしていなかっただと、思い知りました。」